令和６年度学校経営計画に対する最終評価報告書

重点目標	具体的取組	実施状況の達成度判断基準	12月結果	分析(成果と課題)及び次年度の取組
1　生徒指導の方針・基準に一貫性を持ち，時代の変化に適応しつつも毅然とした指導で，基本的な生活習慣の定着と規範意識の高揚を図る。	①　挨拶を含めた所作の指導を，ＳＴ・授業・休み時間，学校行事等「遅刻ゼロ・鶴高挨拶運動」で指導する。	学校に関係する方々にはもちろん，生徒間の挨拶も積極的にできる生徒の割合が， A　90%以上 B　85%以上90%未満 C　80%以上85%未満 D　80%未満	84.6% 判定C	自らすすんでよく挨拶している生徒は全体で84.6%と前年度と比較して6.5ﾎﾟｲﾝﾄ減少した。前期では9割以上の生徒が積極的に挨拶していると回答していたが，アンケート実施時期にインフルエンザ等の感染症が流行し，積極的に挨拶が出来ない状況下にあったため，やや低調な数値となった。このため，12月下旬には風紀委員会による「鶴高挨拶」や「遅刻未然防止」をテーマに生徒同士で話し合いの場を設けた。生徒達からは，標語を募り良い作品を掲示する啓発活動に取り組む提案が出され，委員による作品を校内に掲示し，生徒全体に挨拶や時間管理の意識付けを行った。その結果，1月には生徒達から積極的な挨拶が多く見られるようになってきている。 次年度においても，引き続き生徒達による啓発運動を継続するとともに，教職員が率先垂範して挨拶し，学校行事や集会等をとおして挨拶と時間管理の意義や効用を説くことで，意識向上に努めていく。
	②　日常の観察の中で生徒の状況とそれに対する指導方針を共有し，全教職員が積極的に指導にあたる。	服装容儀等について積極的に声かけをしている教職員が， A　95%以上 B　90%以上95%未満 C　85%以上90%未満 D　85%未満	87.5% 判定C	服装容儀や規範意識を高めるため積極的に声かけを行っている教員は，87.5%と前期に比べ5.8ﾎﾟｲﾝﾄ低下したものの，年間をとおして9割以上の職員が積極的に生徒への声かけを行っている。このことが，91.2%の生徒，95.7%の保護者が生徒の身だしなみ等，服装容儀指導に対して肯定的な評価となっている。特に，3年生では98.6%の保護者から良好と，高い評価を得ることができた。 次年度においては，他者を不快にさせない身だしなみや校則の遵守という従来の観点のみならず，第一印象の重要性やＴＰＯとの整合性，身だしなみはノンバーバルコミュニケーションの一つであること等，コミュニケーションスキルという観点からも意識付けを図り、より効果的な指導に繋げていく。
	③　学校生活の重要性を伝えながら，学校生活全般が充実感をもって過ごせるよう個々の指導に努める。1日のよいスタートをきれるように，5分前登校の重要性を粘り強く指導していく。	年度内で3回以上遅刻した生徒の数が， A　40人未満 B　40人以上45人未満 C　45人以上50人未満 D　50人以上	74名 判定D	遅刻3回以上遅刻した生徒が74名とＤ評価になった。本校では遅刻3回ごとに反省文等の指導をしているが，3度以上指導（遅刻9回以上）を受けた生徒が33名いる。これらの生徒は，単なる怠学傾向だけではなく，スマートフォン依存による生活リズムの乱れ，人間関係や学習上の悩み，心的な要因による体調不良等，様々な理由や実態があるため，生徒一人一人に応じた指導や支援が必要となっている。関連したアンケート項目では，「朝の始業5分前に着席を心がけている」と回答した者は，全体で前年度同期比3.8ﾎﾟｲﾝﾄ減の74.1%（学年別：3年72.2%，2年77.8%，1年71.4%）という結果となっている。さまざまな家庭環境の変化や自然災害等による心理的要素も本年度は重なったものと推測する。 次年度も学年団，家庭との連携を密にしながら，昨年同様，遅刻の問題を不登校問題と同様に捉え，いじめ不登校問題対策委員会を通じて情報共有を図り，必要に応じてスクールカウンセラーや外部諸機関の協力を得ながら，即応的かつ継続的に対応していく。
	④　「いじめ・不登校問題対策委員会」等で生徒情報を共有し，全職員が連携して「いじめ」が根絶されるよう努力する。	「いじめがなく安心できる学校である」と感じている生徒の割合が， A　90%以上 B　85%以上90%未満 C　80%以上85%未満 D　80%未満	85.5% 判定B	いじめがなく安心できる学校であると感じている生徒は，全体で85.5%と2.3ﾎﾟｲﾝﾄ増加している。学年別では，3年85.2%，2年82.2%，1年89.3%で，2年生で3.0ﾎﾟｲﾝﾄの増加，1年次からは11.3ﾎﾟｲﾝﾄもの大幅な増加が見られた。今年度の良かった点は，いじめ・不登校対策委員会で積極的な意見交換，情報共有が図られ，特定の職員が一人で抱え込んだりせずに組織的に対応ができたことや，個々の実態に応じてた迅速な対応がとられたことである。また，各学期1回，計3回実施のいじめアンケート調査に加え，googleフォームを利用した相談体制を新たに構築したが，相談件数は0件であった。 次年度では，いじめに関しては，対象の生徒同士だけではなく，その周囲の生徒の様子からも察知できるケースが多いことから，生徒へのこまめな声掛けや観察を継続するとともに，どのような状況や場面から発見できるか等，校内研修や学習会を開催し，より組織的な指導体制となるように努めていく。googleフォームによる相談体制については，相談実績はなかったことから対応を再検討するとともに，アンケート調査の回数，時期等を見直し，面談週間の日課変更による面談時間の拡充等を整備し，早期発見，早期対応を図っていく。さらに，標語ポスターの作成掲示，集会や校内放送による呼びかけ等，生徒主導による啓発運動を強化し，個々の自覚を高めさせる機会を増やし，いじめに限らず生徒指導の諸課題の未然防止教育の拡充に努めていく。
	⑤　学校の環境美化に積極的に努め，校舎内外の環境美化にも取り組むよう指導する。	校舎内外の環境美化にも取り組んでいる生徒の割合が， A　90%以上 B　85%以上90%未満 C　80%以上85%未満 D　80%未満	77.2% 判定D	校舎内外の環境美化にも積極的に取り組んでいると回答した生徒は，全体で77.2%に留まっており，Ｄ判定となった。（学年別：3年7月75.9%→75.9%，2年7月64.4%→76.7%，1年7月76.6%→78.6%） 次年度は，「鶴高クリーン作戦」を継続するとともに，整備委員会による昼休みの放送やポスター掲示等の啓発活動に加え，集会や各種行事，授業等，学校生活全般を通じた積極的な声掛けを展開し，改善を図っていく。
学校関係者評価委員会の評価		・街中で通学の様子を見る機会は少なくなったが，来校した際には明るい表情で元気に挨拶をしてくれる生徒が多いと感じている。地域や将来の就職先でもきちんと挨拶ができることは，人とのつながりを築く上で有益である。今後も挨拶指導を継続してほしい。 ・スマホを持つことで，SNSをとおした自己表現やコミュニティづくり，孤独感の解消等のプラス面もある一方で，生徒達の心に与える不安感や孤独感，いじめ，不眠等，マイナス要因も懸念される。生徒達が心の健康を保ち幸福な学校生活を過ごせるように，社会全体で若者のウェルビーイングを実現していくことが，大人の責務であると感じている。学校で夢中になって取り組めることや自分らしくいられる居場所作りが必要ではないか。 ・スマートフォンへの依存によって，不眠や睡眠不足，生活リズムの乱れ，メンタル面の弊害が表れている生徒も少なくない。就寝前に見ないことやSNSの使用方法，カフェインの多いエナジードリンクの摂取の留意点等について，積極的な指導を行うべきである。 ・震災後の心のケアについては，発生時のストレス症状だけでなく，4～5年先までの長期的な視点で，生徒達の心身の健康問題の理解と対応が求められている。場合によっては，中高で連携しながら対応，支援していく必要があるのではないか。双方で連携を図り情報共有し，継続的な対応ができるよう体制を構築すべきである。		
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善策		・本校の善き校風として，挨拶がもたらす敬意や親愛，信頼関係のコミュニケーションづくり等の効用を生徒に再認識させるとともに，これらの共通意識のもとに挨拶を遂行していくことで，いじめのない安全・安心を土台にした学校運営に繋げていく。また，風紀委員を中心とした生徒目線による啓発運動を計画させ，生徒全体の意識高揚を図っていく。 ・教育相談室長の綿密なコーディネートにより，本校職員にはスクールカウンセラーの役割が十分に理解され，必要な情報共有もなされている等，連携は図られているものの，配置時間が限られ相談時間が短いことや曜日が限られていることから柔軟な相談対応や学校における相談体制の充実という点からは課題となっている。そのため，場合によっては，発達支援コーディネーター，医療機関，警察署，児童相談所等の外部機関との連携を取ることで，より多面的な支援体制の充実を図っていく。		

重点目標	具体的取組	実施状況の達成度判断基準	12月結果	分析(成果と課題)及び次年度の取組
2　生徒が安心して学べる授業づくり（授業規律の維持，授業のユニバーサルデザイン化）を推進するとともに，家庭学習時間の確保や読書量の増加を図り，主体的・対話的で深い学びの実現を目指す	①　毎月の教育相談委員会で報告される生徒情報を，学年会で共有し，より深く把握できるようにする。担任が掴んだ生徒の進路希望を教科会でも共有し，適切に支援できる能力の向上を目指す。	個々や集団に応じた授業を行うために，担任や学年団・教育相談などと生徒情報を相互に共有している教職員の割合が， A　95%以上 B　90%以上95%未満 C　85%以上90%未満 D　85%未満	93.5% 判定B	個々に応じた支援，配慮が必要な生徒に対して，1学期から高い割合で情報を共有し対応している。生徒の情報がある程度わかって対応しているためか，2学期は少し割合が減っている。生徒も1学期から2学期と成長や変化している情報を常態的に共有していく必要がある。それをもとに，個々の対応を見直して（減らすことも含めて）いくことが大切である。 次年度は，限られた人員の中での効果的な対応や，外部機関の協力を仰ぐ等，個々に応じた支援体制方法を蓄積，実践することで，個々の学びの充実と学力向上を図っていく。
	②　１人１台端末の効果的な利用や話し合い，発表の場面などを取り入れ，生徒が主体的に学習に取り組む力を身に付ける。また，そのための学習の評価の仕方を各教科で検討する。	発表や話し合い活動など，積極的に授業に参加したと答えた生徒の割合が， A　90%以上 B　85%以上90%未満 C　80%以上85%未満 D　80%未満	78.5% 判定D	前期に比べ1.8ポイント増の78.5%と低調な結果となった。学年別では1年生が82.1%と最も高く，2年が76.7%と次ぎ，3年生は前期比5.6ポイントの大幅増となったものの78.5%に留まっている。教科の学習活動を通してホームやコース内の対人交流を深めることで，個々の将来への展望を見据え進路目標や行動計画を立てたり，現在の学校生活が将来につながるものという実感をもたせたりするために，話し合う場面や議論する場面を増やしていく必要がある。 次年度では，より主体的な活動を促すためには，教科の授業だけでなく，総合的な探究の時間，学校や学年行事，部活動等，学校全体で探究学習の場面を意図的に取り入れることで，主体的に考える力の向上を目指していく。
	③　個に応じた進学指導，就職指導を充実させることにより，自尊感情を育み，希望進路の実現を果たせるよう努力させる。	年度末の進学状況において，国公立大学合格者が， A　4名全員 B　2名以上4人未満 C　1名以上2人未満 D　0名	2人 判定B	国公立志望者は2学期以降3名となった。うち2名が国立大学に合格した。活動実績を積んだり，検定資格を取得したりして入試に臨んだ結果が合格につながった。 来年度以降も,学力向上に向けた対策を早期から講じるとともに，進路研究を行って多くの生徒が志望するよう支援する必要がある。
		3月末の就職状況において，就職希望者の内定率が， A　100% B　95%以上100%未満 C　90%以上95%未満 D　90%未満	100% 判定A	学校斡旋希望者は19名おり，うち18名は1次で第一希望の企業に内定した。残り1名も2次試験で10月中に内定した。公務員希望の5名については，自衛隊が3名，消防士が1名の計4名が合格した。 次年度は例年以上の44名と，就職希望者が大変多いので，2月より随時，丁寧に就職指導を行っていきたい。
	④　家庭学習調査を行い、その状況を分析し、課題の出し方を適切に工夫したり、担任が面談したりすることで家庭学習の習慣を身に付けさせることにつなげる。	家庭学習の時間を確保している生徒の割合が， A　60%以上 B　50%以上60%未満 C　40%以上50%未満 D　40%未満	47.4% 判定C	特進クラスを中心に，週間課題などを課し，家庭学習の時間を確保するよう指導している。今後も継続していきたい。普通クラスでの家庭学習の習慣化が課題であり，検定や探究活動など各自の進路や目標に沿った家庭学習の習慣化が必要である。2年生で家庭学習時間の割合が低く，1年生が2学期に減少している。 普通クラスでも日々の学習だけでなく検定の取得に向けての勉強等，新たな目標を持たせ学習に取り組む意欲を促す必要がある。家庭での学習の習慣化を目指したい。
	⑤　情報科，商業科における各種検定・資格取得を推進するとともに，より上級資格取得に向け挑戦する意識付けと対策講座等，指導体制の充実を図る。	ビジネスコースに在籍する生徒を対象に，各種検定各級取得率が， A　1級2種目取得率30%以上 B　2級2種目取得率50%以上 C　3級2種目取得率70%以上 D　ＡＢＣ未満 ※各検定級合格者数／コース人数	65.2% 判定B	全商各種検定取得状況を合格者数でみてみると，ビジネス計算1級5名，2級23名，3級40名，ビジネス文書1級6名，2級28名，3級36名，情報処理1級2名，2級26名，3級41名，商業経済1級5名2級26名。また，学年別の割合は，3年生ビジネス計算1級31.3%，2級87.5%，3級100%，ビジネス文書1級37.5%，2級87.5%，3級93.8%，情報処理1級12.5%，2級81.3%，3級100%，商業経済1級31.3%2級50.0%。2年生ビジネス計算2級29.0%，3級77.4%，ビジネス文書2級45.2%，3級67.7%，情報処理2級41.9%，3級80.6%，商業経済2級60.0%。3級を2種目以上取得した割合は，3年生16名，2年生25名(89.1%)，2級を2種目以上取得した割合は，3年生15名，2年生15名(65.2%)であった。 1級取得状況については，ビジネスコース在籍者数は3年生16名，2年生30名，計46名のうち，5冠1名，4冠1名，3冠1名，2冠0名，1冠4名と例年以上の堅調な取得率となっている。上位級への興味を高く持ち，次年度へ繋げていけるよう指導していきたい。
	⑥　学校図書室の取り組みを活性化し，積極的に読書に取り組ませる。朝学習や授業を利用して読書を取り入れ，本に触れる機会として図書館での貸し出しを促す。	図書室での年間貸出冊数が， A　1,400冊以上 B　1,200冊以上1,400冊未満 C　1,000冊以上1,200冊未満 D　1,000冊未満	1,024冊 判定C	昨年度同期より微増の1,024冊となっているが，特定の生徒が借りている傾向があるので，新規に借りる生徒への声掛け等，きっかけ作りが必要である。 次年度は，年度当初の図書オリエンテーションは継続するとともに，2学期や3学期には教科や朝学習の担当者，部活動顧問等を通した呼びかけや図書委員会による啓発活動を充実させることで，来館者数を増やし活字に触れ読書に親しむ生徒の増加を目指していく。
学校関係者評価委員会の評価		・中学校における授業や校務のＩＣＴ活用状況については，ベテラン教員の苦手意識もあったが，指定研究での取組，若手教員や活用能力の高い教員からの支援，校務や授業での具体的な効果等が共有された結果，ベテラン層で活用が進んでいる。当校でも似た状況かと思われるが，生徒のより深い学びや業務効率化に向けた実践を積み重ねて頂きたい。 ・授業の質的向上にはＩＣＴ活用は不可欠であるが，学んだ内容を定着させるにはノートがしっかりと取れているか，自分でノートを作ることができているか等，学んだ内容を知識に変えることが不可欠だと，捉えるべきである。学ぶだけで終わらせず，成果につながる学び方の指導の在り方や，デジタル一色になるのではなく，場面に応じてアナログで行っていた学習とのベストミックスを目標として，授業改善に努めるべきである。		
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善策		・各種アプリケーションも使えるようになり，効果的な活用事例を持ち寄り校内ネットワークやTeams等をとおして情報提供を行い，職員間での共有も進められており，活用幅も格段に広がってきている。しかし授業で取り扱う内容や目的によって，場面場面でデジタルとアナログをうまく使い分ける等，現状に満足することなく，生徒のより深い学びや業務の効率化に向けた実践を積み重ねていく。 ・各種のアプリケーションが使えるようになり活用幅も格段に広がってきている。各教科の実践を踏まえ，教科会等で効果的な活用法も共有されてきた。教科によっては，表現手段のみならず，より効果的な指導方法や生徒の深い学びに活かせるツールの活用方法等の教材研究もみられ，より発展的な活用実践となってきた。次年度はこれまでの取組を活かして，生徒の学びのプロセスを蓄積し各自の学びを振り返るデジタルポートフォリオを作成し，評価改善のサイクルを確立するための指導体制の整備を図っていく。		

重点目標	具体的取組	実施状況の達成度判断基準	12月結果	分析(成果と課題)及び次年度の取組
3　教育活動の速やかな情報発信と地域社会と連携・協働した活動の推進で，地域や保護者から信頼される学校づくりに努める。	①　中学生やその保護者に対して従来のホームページに加え，新たにSNSアカウントを設置・運営し，学校行事や部活動の大会情報，日常の学校生活等をよりタイムリーに公開することで，本校への理解を深め志願者の増加をめざす。	SNSアカウント（鶴高インスタグラム）の「グッド」数が，平均で A　180件以上 B　150件以上180件未満 C　120件以上150件未満 D　120件未満	平均 138件 判定C	7月集計以降，13回更新し，12月末までに28回の情報提供を行った結果，平均138件のグッド評価を得た。閲覧数が伸びなかった前期の反省を活かし，「リール動画」や「ストーリー」機能に着目し，若年世代が多く目にする機会を設定したが，閲覧数は増加したものの，グッド評価を得るまでに至らなかった。しかし，地域の方々からは「鶴高インスタを見てるよ」という声を広く聞くことも出来た。今後の志願者増加や，地域との連携強化となっていくよう，今後も反省を活かし発信力を高めていきたい。 学校ＨＰの閲覧数は，月平均で12,509件と，前年同時期より約7,500件の大幅な減少となった。最も多かった月は10月で15,255件であったものの，年間を通じて低調であった。せっかく高評価を得た昨年の盛り上がりを衰退させないよう，一層の閲覧数増加を目指し，こまめな更新，タイムリーな発信に努めていく。
	②　「総合的な探究の時間」の活動を通して，生徒が興味・関心を持つ分野の課題に気づき，その問題の本質を考え，解決方法の検討等に取り組む学習活動を充実させていく。	「総合的な探究の時間」の活動において，積極的に取り組むことができた生徒の割合が， A　80%以上 B　70%以上80%未満 C　60%以上70%未満 D　60%未満	91.7% 判定A	自らの生き方在り方を考える上で役立ったと考える生徒は，1年生は96.4%と高く，3年生は92.6%と，これに次いでいる。1年生が高い要因として，1学期に大学見学やそれに伴う事前学習，系・科目登録をきっかけに自らの適性や進路を考える機会を持ったことがあげられる。また，就業体験に関する活動を通して学校外で学ぶ機会があったことも要因である。3年生においては，前期に比べてさらに増えている。　進路先決定後，「人生には失敗は無く継続的に挑戦することこそ大切である」という内容で探究活動を行ったことで，さらに将来に希望を持てたことが数値に表れたものと考える。 次年度もこれまでの自己探究に加え，地域課題の解決を目指す活動や実践的取組に繋がる探究活動となるように，指導体制の改善充実に努めていく。
	③　生徒・教職員・保護者が一体となり，手取川歩行や花いっぱい運動を通して，地域のボランティアや小中学校と連携した活動に取り組み，地域とのつながりを深めていく。	学校行事や課外活動において，地域のボランティアや小中学校と連携した活動に取り組むことができたと思う生徒・教職員・保護者の割合が， A　70%以上 B　60%以上70%未満 C　40%以上60%未満 D　40%未満	生徒 42.7% 判定C 教職員 59.4% 判定C	昨年同期と比較すると，全学年での減少が見られた。特に2年生については10ポイント以上の減少であった。主な活動としては，5月には商業部が加賀市で被災者ボランティア活動，10月には生徒会が校内で赤い羽募金活動，11月にはビジネスコースで一六市での販売ボランティア活動，柔道部の白山青年の家野外ボランティア活動，各部活動での近隣中学校との合同練習等も行われている。 一方，教職員も昨年同期に比べ意識が低くなってきている。一部部活動の取組だけでは，生徒全体にボランティア活動の意義が伝わりにくく，取り組んだ成果を鶴翔祭で発表する等，啓発や指導の工夫と改善を図っていきたい。また，スポーツや文化的行事を通じた地域連携の取組を今後も充実させていきたい。

学校関係者評価委員会の評価	・「鶴高通信」では，毎号，部活動や地域貢献活動等，生徒の活躍の様子が報告されている。家族や親子間での共通の話題となり，家庭内のコミュニケーションづくりに役立っており，今後も発刊を継続していくべきである。 ・高校受検では，志望校の正確な情報提供をすることを重視し進路指導を展開していることから，今後も当校の特色・魅力を伝える情報発信を積極的に進めてもらいたい。 ・地元の声として，地域の伝統を引き継ぐことの大切さがよく話題になる。地元愛は，単に地域に対する感謝の気持ちだけではなく，その地域の文化，伝統に対する深い理解と尊重から生まれるものである。当校には，部員不足ながらも地域が誇る護摩堂太鼓の伝統を引き継ぐ県内でも稀少な和太鼓部があるので，その存続と活性化に取り組んでほしい。地域としても，コロナ禍以前のように関係諸機関の催事等で，生徒が発表する機会が設けられるよう促していく。
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善策	・従前どおりタイムリーでこまめな配信を基本方針として，報道機関やＨＰ，インスタグラム，「鶴高通信」を通じて，本校の魅力や特色を中学生やその保護者にアピールしていく取組を継続していく。特に，インスタグラムでは，より見てもらえるようなハッシュタグの活用，投稿時間帯の分析等，発信方法の工夫と改善を図り，リーチ数増加をめざしていく。 ・次年度も7月の体験入学以後も9月～11月中に数回の，学年不問で保護者も参加可能な学校説明会を実施し，本校の教育活動の特色・魅力の周知に努めていく。 ・部活動やボランティア活動等の課外活動に留まらず，学校設定教科「地域」やあじさいタイム（総合的な探究の時間），スポーツ科学コースの専門科目等，教育課程内において，地域の文化や伝統への深い理解と尊重を促す学習教材の開発や指導計画の作成，実践を積み重ねていく。また，より地域に関する内容を学びたい生徒のために，次年度に現教育課程を一部見直し再編成作業にあたり，令和８年度入学生からの条件整備を進めていく。 ・課外活動では，地域探究会による地元小中学校や放課後児童クラブ等を対象にゲーミフィケーションによる出前授業の開催や，鶴来商工会やＮＰＯ法人等による地域振興イベント等への参加を継続していく。また，新たに同窓会鶴来支部との連携を強化し，情報や意見交換の機会を増やす等，関係諸機関との連携をより深化させていく。

重点目標	具体的取組	実施状況の達成度判断基準	12月結果	分析(成果と課題)及び次年度の取組
4　教職員自ら，これまでの働き方を見直し，限られた時間の中で，教材研究・授業準備や生徒と向き合う時間を十分に確保できるようにする。	①　各教職員が自らの勤務時間や業務内容を的確に把握するとともに，毎月の業務の流れの中で先を見通し，区切りを意識した計画的・効率的な遂行に努める。	学習活動や部活動への指導の質の向上を図りつつ具体的な計画や取組を行い，時間外勤務を減少することできた教職員の割合が， A　80%以上 B　70%以上80%未満 C　60%以上70%未満 D　60%未満	78.1% 判定B	学習活動や部活動への指導の質の向上を図りつつ，具体的な計画や取り組みを行い，時間外勤務を減少することができたとする職員の割合は前期比6.7ﾎﾟｲﾝﾄ増の78.1%と，堅調な数値となった。 また，80時間超過者は延べ人数15名，実人数は8名と前年同期より延べ人数で2名の増加，実人数で増減なしとなった。月別推移では，減少した月は4月0名（前年度比3名減）5月0名（3名減），12月1名（1名減）で，増加した月は6月2名（1名増），7月4名（4名増），9月5名（2名増）10月3名（2名増）となり，8月，11月ともに0名で増減なしとなった。 さらに，45時間以下の職員の割合は75.0%と前年同期比6.6ﾎﾟｲﾝﾄの増加となっており，全体として堅調に改善に向かっている。 次年度以降は，職員会議日に加え中間考査後の面談週間における短縮日課の設定，定時退校日の割振りによる確実な遂行，部活動の計画的な運営等，業務整理による残業削減を図っていくことで，より堅実な遂行体制の整備に努めていく
学校関係者評価委員会の評価	・土日曜日や祝日の部活動指導やボランティア活動や地域交流等の引率業務にあたる職員に対しては，負担軽減がなされるよう業務の平準化を図るべきである。時間削減も大切であるが，教育の質を落とさないためにも，職員のモチベーションを如何に維持していくかが肝要であろう。また，学校生活全般を通じて，教育の質的向上を図るために職員が気づいたことは直ぐに取り組む等，ワンランク上の教育活動を期待するとともに，学校改革にも繋げてもらいたい。 ・当校の教員の時間外勤務は改善傾向にあるが，全国的には学校職員の長時間勤務，部活動や生徒指導の負担に加えて，全国的にも教員のなり手不足，欠員が生じる教員不足の問題もあり，学校の労働環境が注目されている。生徒に効果的な教育活動を行うためには，授業準備や生徒と向き合うための時間の確保が不可欠であることから，着実に業務改善を進めてほしい。			
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善策	・若手教員が成長ややりがいを感じられるよう，若手ならではの柔軟な発想力やＩＣＴの活用スキル，生徒との距離感の近さ等，ベテラン教員も若手教員から学ぶべき点は多いはずである。相互が積極的に関わり，組織の中で自己有用感を高めていけるマネジメントを推し進めていく。 ・月80時間以上超過勤務者ゼロ，月45時間以下の勤務者数の増加を実現するために，職員の意識改革の啓発や職員会議等の会議日における短縮日課の設定，各種会議・打合せ会の開催精選，運営の効率化，定時退校日の割振りによる遂行，部活動の計画的な運営等，業務整理による残業削減を継続していくとともに，授業のさらなる改善や分掌業務の質的向上，分掌業務の一部再編等の取組も働き方改革に位置づけ，堅実な遂行体制の整備を図っていく。 ・各分掌に対して，業務の偏り，業務の属人化が解消されるよう，現状の業務システムの見直しを管理職との定期的な面談等を行い，場合によっては弾力的な対応し改善を図っていく。			